

# 聴覚障害者における中年期の心理的課題の特徴と支援

——アイデンティティの再体制化に着目して——

19002FRM 内之倉 純華

## Ⅰ. 問題

### 1. 聴覚障害者の心理社会的発達とろう教育

従来のろう教育においては、聞こえないことを克服させるため、健聴者の口の形と発音を覚えさせ音声による会話ができるように指導する方法である聴覚口話法の訓練がさかんに行われてきた。当事者団体である全日本ろうあ連盟などの活動を受けて1993年に文部科学省は聴覚口話法の限界を認め、手話をろう教育に導入することを認めた。Schlesinger & Meadow(1972)では、このような環境下で育った聴覚障害者のアイデンティティ形成がポジティブに形成されることは難しいと述べている。

### 2. アイデンティティの再体制化に関する課題

岡本(1991)では、中年期の危機を乗り越えられない人においては、3タイプの不適応の様態を示すとしている。1タイプ目は青年期に獲得したアイデンティティの枠組みの中だけで生きる「軌道内安定志向型(妥協型)」である。これまで培ってきた価値観や考え方を変えられないでいる状態である。2タイプ目は青年期の課題が未達成のまま中年期を迎えてしまった「青年期のアイデンティティの未確立型」である。これまでは親の援助などを受けて問題が表面化してこなかったが中年期に問題が顕在化するとされている。3タイプ目は年齢に見合った心の成熟性が達成されていない「永遠の青年型」である。ネガティブな心理的・社会的・身体的変化の体験を否認し、直面化することを避けているとされている。

### 3. 聴覚障害者における中年期のアイデンティティの再体制化の特徴

健聴者基準の価値観から障害者であることを

肯定的に捉えられずに、健聴者集団に適応できるような教育を受け、手話の使用を禁止されてきたために第一言語を獲得することもままならず聴覚障害者は成長する。言語獲得が十分でないことから抽象的・論理的思考の難しさが生まれ、指示された内容の理解が周りとずれたり、障害特性から来るコミュニケーションの困難さからも人間関係の構築に躓きが生じたりする

(庭野, 2016)。そのため、青年期においてアイデンティティの確立をすることや社会に出た後に青年期に確立されたアイデンティティが成熟していくこと自体にも課題があるといえる。ゆえに、聴覚障害者における中年期のアイデンティティの再体制化の特徴としては、岡本

(1991)が述べる「青年期のアイデンティティの未確立型」や「永遠の青年型」に近い様態を示すだろう。これらのタイプであることが考えられる中年期の聴覚障害者は中年期の発達課題を乗り越えられないでいることが推察される。

## Ⅱ. 目的

本研究は、これまであまり研究がなされてきていない聴覚障害者の青年期以降のとくに中年期のアイデンティティの再体制化にまつわる課題にみられる特徴について検証することを目的とする。

## Ⅲ. 方法

### 1. 調査協力者

調査実施者と同じ手話サークルに通う41歳から62歳までの聴覚障害を持つ男女8人に個別に依頼し調査を実施した。

### 2. 調査内容

心理社会的発達課題の達成度を測定するためにエリクソン心理社会的段階目録(EPSI)を行い、生育歴等聞き取りの為に面接調査を、内的

体験様式をみるために名古屋大学式技法によりロールシャッハテストを、併せて自己イメージを捉えるためにバウムテストを実施した。

#### IV. 結果

##### 1. 面接

幼少期では障害を意識することが少なかったが、障害によって生じた環境の変化（ろう学校入学など）が自己を認識することに強い影響を及ぼしていることが示唆されている。障害の特性から職場の雰囲気になじめずに転職を繰り返す人もみられ、障害特性が対人不安や社会参加不安を強めているものと考えられる。

##### 2. EPSI

アイデンティティの確立の前段階から課題がみられ、その後のすべての発達段階においても困難がみられている。アイデンティティの確立がうまくいかないままに現在に至っていると示唆されている。

##### 3. ロールシャッハテスト

Ⅷ・Ⅸ・Ⅹ/R%の高さなどから情緒的な刺激に動かされやすい傾向があり、そのため刺激に対しては取り入れないように距離をとったような反応が示され、不安を回避的に処理するパターンが多くみられている。現実吟味力の低さや独特の認知構造、狭い視野など他者との共感性を持ちにくい特徴が多くみられ、H%が高く対人関係に過敏でありながらも、気遣いや配慮が一般的なものからずれており、親密な関係を築くことに課題があると考えられる。自己イメージについては、断片化されていたり拡散されていたりと矛盾する側面がうまく統合されておらずA%の高さからも内省傾向の乏しさや認知の社会化不全の様子が認められる。

##### 4. バウムテスト

木全体の左側への傾きや左側の幹への枝の密着や植木鉢の中に木が描かれるなど母子密着の課題がみられている。実を描かなかった調査協力者が半数みられたところからは、これまで社会的評価を受けた実感が得られていないことやそのことへの無関心さ、諦めが示唆されている。大半が単線で簡素な描画であり、自己イメージ

の希薄さや情緒の未熟さ、退行願望の示唆されている。

#### V. 考察

##### 1. 結果からみえた課題と社会適応のよさ

結果からは認知の社会化不全や母子密着などの心理的な課題がみられている。青年期にアイデンティティの確立をし、中年期頃に主体的にアイデンティティの見直しを行い、再体制化をするという一連の流れがうまくできていないことが示唆されている。しかし、課題を持ってながらも今回の調査協力者らは社会生活を円滑に送ることができている。現在まで継続して仕事をする事ができているため社会参加ができている状態といえ、1人を除いた調査協力者全員が家庭を築いており、他者と親密な関係を結ぶことができているといえる。社会参加については聴覚障害者への物理的な配慮が徐々にされるようになってきたことや障害者に関する教育が普通学校で取り入れられ調査協力者たちよりも若い健聴者集団において聴覚障害者への偏見や関わることへの抵抗感が薄れてきたことが要因に挙げられる。他者との間で親密な関係性を築くことができていることについては、配偶者が同じくろう学校で育った同程度の聴力レベルの聴覚障害者であり、意思の疎通も取りやすく、先行研究で想定されていたような健聴の他者と比べて関係性づくりに困難が少ないことが挙げられる。面接の語りから、健聴の母親や父親、息子、娘等からの助けがあり、他者とのやりとりを仲介する通訳者役を担うなど健聴の家族からのサポートが手厚く、生活を円滑に送ることができる状態になっている現状もみられている。これらから、心理的な課題を持っていても今回みられたような社会適応のよさを生み出していると考えられる。

##### 2. 今後の課題

社会適応の良さについては検討の余地があると思われる、今回の調査協力者と異なり社会適応ができていない他の聴覚障害者への支援につながる事が考えられるため、さらなる研究が必要となる。